ＩＩＡＳ「ゲーテの会」ブックレット
（VOL. 01017）

未来社会をいかに拓くか
― 未来社会を担う新しい人間像を探る ―

（思想・文学分野）

伝統文化と未来社会

公益財団法人国際高等研究所
＜「新たな文明」の萌芽、探求を！＞プロジェクト

本ブックレットは、2014 年 12 月 4 日開催の第 17 回『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」』の講演録を基に、公益財団法人国際高等研究所<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局が編集・制作したものである。
※本ブックレットの無断転載・転写を禁じます。ただし、個人としての利用の範囲内であれば、コピーしてご利用いただけます。

未来社会をいかに拓くか

― 未来社会を担う新しい人間像を探る ―

伝統文化と未来社会

日本には伝統社会で生み出された文化・芸術財が膨大に存在している。そしてそれらは世界文化遺産として認定されるものが数多く存在するように、世界的に高い評価を得ている。しかしそれらは現代文化とは見なされず、博物館に陳列されるものとして、保存対象という観点で扱われている。

この分断と遮蔽は何故に生じたのか。これら膨大な伝統文化芸術財を過去のものとしてではなく、現代社会の戦略的資源として活用し、そこから未来を切り開いていくという方途について考える。

笠谷 和比古（Kazuhiko KASAYA）

1949 年生まれ。国際日本文化研究センター教授。

専門は歴史学（日本近世史、武家社会論）。近世の国制と天皇制、武士道の思想と行動形態などを研究テーマとする。また、日本の膨大な伝統文化の財産を、現代の資源として活用する応用・実践のプロジェクトを推進。

著書に『武士道－侍社会の文化と倫理』（エヌティティ出版）、『伝統文化とグローバリゼーション』（エヌティティ出版）、『武家政治の源流と展開』（清文堂出版）などがある。

目次

はじめに　～伝統文化の現状

Ⅰ　日文研伝統文化プロジェクトについて
（１）　保存から、進化・発展の途へ
（２）　伝統文化プロジェクトの四部門
　①　街づくり　～景観問題、まちの再生計画
　②　物づくり　～ネオ西山文化フォーラム
　③　人づくり　～精神文化、道徳と人間、武士道
　④　劇づくり　～舞台芸術

Ⅱ　物づくりにおける伝統文化と未来
（１）　ネオ西山文化フォーラム
（２）　竹製電気自動車
　①　第１号　～竹の集成材を使用
　②　第２号　～竹を編む技術で作製
　③　第３号　～竹をゲル化してプレス加工

Ⅲ　伝統文化と現代　～二つの分断の克服
（１）　伝統世界と現代社会との分断
（２）　経済活動と文化・芸術との分断
（３）　伝統的技能と先端科学との融合の事例

2014 年 12 月 4 日開催
第 17 回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」
テーマ：伝統文化と未来社会
講演者：笠谷 和比古（国際日本文化研究センター教授）

（文中敬称略）

はじめに　～伝統文化の現状

講演の前に素晴らしい演奏を聴かせていただいたので、まずはそれについて触れたい。私は音楽が好きで、毎日聞いているほどだが、今演奏していただいた方々は、日本で超有名というわけではなくても、世界に比肩できるだけの技量を持たれていると思う。フルートもピアノも一流である。それほど、日本は明治以降、西洋文化を受容し、高い位置についている。世界のオーケストラにおいても、コンサートマスターをはじめ、日本人は世界中で活躍しており、その力量は大変なものである。これが、日本が西洋文化を受容してきた大きな成果であり、また、本日の話にも関わるところである。

では、伝統文化はどうかというと、これについては寒さを覚える。日本の音楽教育を考えると、西洋音楽は必ず入っているが、果たしてそこに伝統音楽の入る余地があったかどうかという問題がある。

じつは、日本は伝統音楽の宝庫である。雅楽、能楽、近世に入ると大阪には浄瑠璃、義太夫が生まれた。この義太夫と文楽を蔑ろにしているのが大阪市長だというのは、いよいよもって寒々しいことだが、さらに歌舞伎では常磐津、清元、新内、長唄とあり余るほどの伝統音楽がある。

しかし、これらは学校教育で教えられていない。学校教育の音楽の教科書は最初から最後まで西洋音楽で占められており、最後に付録の形で雅楽や能楽の写真が 2 ページくらい入っていれば良い方である。教師や学校に配慮があれば、能楽鑑賞会や歌舞伎・文楽の鑑賞会という形で見る機会があるが、正規の音楽教育ではそれらに触れる機会は作られていない。そこで、我々は、この歪さを以前から非難していた。9 年ほど前、ようやく教育要領が変わって、文部省は伝統音楽を教えなければならないと教育指導要領に入れたが、明治から 100 年以上経って、ようやくそこに思い至ったというのは驚くべきことである。

ところが、伝統音楽を教えると言っても、教える先生方は芸大でピアノを習ってきた人たちなので、いきなり三味線や雅楽を演奏しろと言っても無理である。それで今、教育現場は大変に混乱している。この辺りなら、兵庫教育大学に伝統音楽を先生方に教えるための教育プログラムがあるので、そういうところに全国の小学校から音楽の先生が研修に来て、三味線の練習など、にわか仕立ての伝統音楽教育を受けているが、それによって反対の弊害を生み出している。西洋音楽の音階、音律と、日本の伝統音楽の音階、音律は全く違うため、今までピアノを学んでいた人が全く違う邦楽の音階、音律で音を奏でると、両方が狂ってしま

う。ピアノの先生の本来の音感も狂えば、ドレミ音階が邦楽に持ち込まれることによって邦楽も狂う。両方が多大な被害を被っているのである。

したがって、今のピアノやオルガンを弾いている先生に邦楽を学ばせるのではなく、学校教育の場に義太夫文楽のプロフェッショナルを呼んで、和楽器で実演していただくのが一番良い。法外なギャラもなくて済むと思うので、若手養成の人たちに来ていただいて、三味線や能楽、獅子舞を実演してもらえばよいわけである。学校の先生に無理やり伝統音楽をさせるところに、現在の教育現場の混乱が見える。

結局、日本は明治からこの方、音楽の面だけを見ても迷走状態を脱していない。これをどう調和させるかが我々の課題である。本日は「伝統文化と未来社会」というテーマでお話しするが、すべてにわたってそのような問題が出てくるということである。

Ⅰ　日文研伝統文化プロジェクトについて

（1）保存から、進化・発展の途へ

私の専門は武家社会と武士道であり、日文研では伝統文化プロジェクトの長を務めているが、この日文研の伝統文化プロジェクトは、前述のように、日本の社会には伝統文化の財産が豊富に、無尽蔵と言ってよいほど存在しているにも関わらず、保存するという観点でしか捉えられず、後ろ向きの見方でしかないという問題からスタートしている。

このような伝統文化を「日本の現代文化」と言う人はほとんどいないと思う。その中で「和食」は活動が活発で、「和食」が伝統文化かつ現代文化になりつつあるのは良い例かもしれない。しかしながら一般には、「伝統文化はこういうもの」「現代文化はウェスタン」とステレオタイプ的に考えられている。例えば、今の音楽文化が典型的で、伝統文化は日本の本来のものだが、現代の音楽、学校で教える音楽は西洋系の音楽が当たり前という形になっている。「能楽や義太夫は音楽か」「長唄、常磐津は音楽なのか」とよく聞かれるが、これらは西洋音楽とは全く次元も原理も違う音楽である。我々はあまりにも西洋音楽を音楽という形で刷り込まれてしまったために、あれだけが音楽だという狭い見方でしか捉えられなくなってしまったが、あれは西洋中心の一つのエスニックな音楽と考えた方がよい。確かに、他に抜きん出て発達、進化を遂げた音楽であることは間違いないが、世界にはそれと原理も音律も違う音楽が様々に存在しているので、そのように相対化して捉えなければならないと思う。

したがって、これらの伝統文化を博物館に陳列するかのように保存するのではなく、もっと現代の資源として積極的に活用していく方法はないかというのが我々の課題である。それは同時に、日本発信の伝統文化、芸術に基づくグローバルスタンダードを、日本から世界に向かって発信していく営為になると思う。「和食」はその一番良い模範、実例だろう。「和食」を我々の一つのモデルとして、日本初で世界のグローバルスタンダードになるとはどういうことなのか、それを戦略として考えている。これは後ほどもう一度考えたいと思うが、

今「和食」が元気であるように、すべての様々な資源が元気になってほしい。

そのなかで例を挙げると、例えば、俳句は英語俳句、ドイツ語俳句などがあり、短詩という形式で海外でも非常に人気がある。私はベルリンにいたが、ドイツでも俳句は大変に盛んであり、向こうでは五七五のそれぞれの区切りをシラブルで捉え、五つのシラブル、七つのシラブル、五つのシラブルの形で短詩を組み上げる。それが英語、ドイツ語型の俳句である。これらを繋げていく連句という形式も捉えている。

他には、盆栽も大いに人気がある。このように、すでにグローバルスタンダード化しつつあるものがいくつか見受けられるが、それらをすべて鍛え上げて、日本が持っているハイテクの技術と統合することにより、パワフルな日本初のグローバルスタンダードにしていきたい。手前味噌だが、武道が人気なので精神文化としての武士道も自ずから世界中で人気となっている。

（2）伝統文化プロジェクトの四部門

伝統文化は多岐にわたるが、どれもこれも手をつけるわけにはいかないので、4 部門に分けている。

① 街づくり ～景観問題、まちの再生計画

1 番目は「街づくり」で、景観の問題である。景観形成に伝統的な景観を活かしていく。我々の活動は、大阪の船場地区の再生計画に協力を求められたり、京都の景観問題等にも携わったりしている(この講演の後、岐阜県の関ヶ原古戦場の活用プロジェクト、かつて日本の首府であった京都伏見の街の活性化プロジェクトにも関わっている)。

② 物づくり ～ネオ西山文化フォーラム

2 番目は、本日の題目の一つである「物づくり」で、物づくりの分野にいかに伝統的な技と今日のハイテクを統合するか、それがこれからの日本の経済活動にとって大きな役割となり、意味するところではないかと思っている。

【西山文化を語る会】（撮影：笠谷和比古）

そこで、我々は伝統的な文化資源である竹を素材として、その可能性を様々に研究してきた。我々は京都の桂坂にいるが、近くに京都大学工学部が移転してこられ、京都芸大も近いので、文化・芸術・工学の三者が一緒になってプロジェクト「ネオ西山文化フォーラム」を立ち上げた。京都大学の副学長の松重先生は工学の先生だが、文化や芸術にも大変造詣の深い方で、意気投合し、その三者で伝統的な資源、素材に基づく物づくりを考えたわけである。そして、一つの成果物として、ボディが竹でできた「竹製電気自動車」を製作した。

（竹の家屋）ネオ西山文化フォーラム
（撮影：笠谷和比古）

その経緯は、2008 年に洞爺湖で G8 サミットが開催された頃、すでに地球温暖化問題が叫ばれていたが、日本もホスト国として積極的にこれに関わらなければならないということで、京都大学から電気自動車を提案するという話が出てきた。ただ、電気自動車自体はすでに世界中でいろいろなものがつくられていたので、日本から出す以上はもう一段掘り下げたいという話になり、我々が竹に取り組んでいたのと合わせて、竹製の電気自動車をつくろうという話になった。それで、ほぼ竹でつくられた電気自動車を提示した。

ところが、あまり日本では人気がなくて、その後は先細りしてしまい、あまり受け入れられなかった。日本でこういうものを作ると「奇妙なものをつくっている」と珍奇な目でしか見られない。そこに大きな問題がある。

ただ、外国では大変に喜ばれた。それは、外国では人と同じものを作ることに何の意味も見出さないからである。私はドイツで学校教育や大学の教育を見聞きしたが、人と同じことを言う者はいなかった。「君自身の考えを言いなさい」という教育で、仮に内心は他の誰かと同じ意見だったとしても、他の人がすでにその意見を表明していたら、その意見は除外しなければならない。つまり、B 君は先に発言した A 君の意見や、もちろん先生が教えた内容も除外して意見を表明する。先生が教えたことをオウム返しするのは全くだめである。

日本なら、先生が教えたことを翌週にペーパーテストで自分の言葉で書けば 80 点以上もらえるのが当たり前だが、ドイツでそれをすると 0 点である。自分の頭で考え、自分の言葉に言い換えたとしても、アイデアの根本が同じである限りはゼロなのだ。そうなると、B 君は先生の言ったことも A 君が言ったことも除外して意見を述べなければならない。さらに、C 君は先生が言ったことも、A 君が言ったことも、B 君が言ったことも除外して、独自の見解を出さなければならない。まるで雑巾を徹底的に絞り上げるようにして考えていくわけである。それを小学校のときからやっている。それで、いよいよ新たな意見が出る余地がないとなったら、次の問題に進み、同じように意見表明を繰り返すのである。このように、日本とは鍛え方が全然違う。我々は小学校の頃から、先生から教えられたことを記憶し、翌週にペーパーテストを受けたときに、先生が言った通りに書けば合格で、違うことを書くと問題児にされた。先生が言ったことを理解できるように書けるまで居残りをさせられるのが日本のあり様であり、ドイツでは先生が言った通りに書くと 0 点になるという、それがあちらのオリジナリティの考え方である。

そのため、竹製の電気自動車は海外ではイギリスの BBC でも取り上げられるなど評価されたが、日本では奇妙奇天烈なものをつくっていると相手にもされない。これは大きな問題である。すべて外国流が良いというわけではないが、オリジナリティに対する考え方がかくも違うことを、我々はしっかりと押さえておく必要がある。

ただ、日本流がすべて悪いわけではなくて、オリジナリティばかりを追求すると、逆に偏った人間ができてしまう。何でもはったりをかけて耳目を驚かせれば良いという話になり、基礎教育がいい加減になる。先生が教えるということは、人類 5000 年の叡智を 1～3 年のプログラムの中で伝授していくことである。それをその通り学習して、知識として身につけて、尚且つそれが 0 点だというのは、これはまた逆の病理現象ではないかと思う。

そこで、私は伝授の要素と創造の要素の両方を組み合わせるような教育プログラムを作るのが一番妥当ではないかと考えて、50 点加点減点併用法を提案している。先生が教えた通りにきちんと把握できれば 50 点を与えるが、60 点の及第点には 10 点足りない。最低でも 10 点のオリジナリティを表現する加点を取らなければ合格点にはならない、という評価法である。加算の方は青空天井なのでいくらでもできる。受動的教育に基づく 50 点の基礎点とその上に独自のオリジナル点を加算するという形にするのが、バランスの取れた教育ではないかと思う。

例えば、ドイツ的な独創教育だけを行った場合、どうなるかというと、九九計算ができないような偏った人間ができてしまう恐れがある。九九に独創性はいらない。ひたすら暗記すればよい。あるいは、字が書けない人間ができる。日本で漢字を書けないことは、海外ではスペリングができないことになるが、それができない人間ができてしまうのである。そういう意味での偏った人間が他方でできるので、基礎教育を疎かにするドイツ流にも私は問題があると思っている。

しかしながら日本は受動的基礎点だけで「優」80 点が取れてしまうほど、逆に偏った教育方式なので、これは喫緊の課題として改めなければならない。そうしなければ、独創性的なものができるはずがない。「竹製の電気自動車をつくるような者は問題児だ」と排除される運命しかない。実に寒々しい風景ではないであろうか。

③　人づくり　～精神文化、道徳と人間、武士道

3 番目は「人づくり」である。ここでは武士道などの問題が出てくる。

具体的な例では、食品偽装の問題、あるいは組織不正の問題がある。不正が起きたときに「それはおかしい」と声を上げる人物が日本の社会では出にくい。不正を見て見ぬ振りをすることで、不作為の共謀者になってしまう。後になって「なぜ不正を指摘しなかったのか」と問われても「言える雰囲気ではなかった」という話であり、この繰り返しとなる。

他方では内部告発があるが、これもまた病理的な問題である。匿名のまま組織内部の不正を外部に暴き立てるのは、逆に密告という形の陰湿な病理を孕んでいる。そうではなくて、正々堂々と「おかしいものはおかしい」と言えるような社会をつくることが大事だと思う。

あるいは、「いじめ」の問題とも関わる。日本の社会の大きな病理の一つが「いじめ」だが、そこにはいろいろなタイプの「いじめ」がある。私が一番問題だと感じるのは、無視という形の「沈黙のいじめ」である。例えば、ドアを開けたら頭の上に黒板拭きが落ちてくる

といった悪ガキの悪戯さの類は、必ずしも一概に否定すべきものではないと思うが、「沈黙によるいじめ」は許し難い。

例えば、ある人が善行をして、それを学校の朝礼で校長先生が表彰したとする。すると、それを周りが「生意気だ」「目立ちたがり屋だ」と言い、次の日から今まで親しく口を利いていた友だちも含めて皆が知らん振りをして、表彰された人を追い詰めていくようなケースである。あるいは、ある人がピアノの演奏会で素晴らしい演奏をして、皆から賞賛されると、「生意気だ」「締め上げてやれ」と言って、その人を孤立に追いやっていく。その人が悪いことをしているわけではないので、悪い点を指摘できず、陰湿な無視という形の追い込みをするのである。そして、最後に破滅的な事態に至ったときに、「いじめ」の存在が明らかになる。そのように、「沈黙のいじめ」は外見的には見えずに進行し、最後に悲劇的な結末を迎えたときに初めて明るみに出る。そういうことの繰り返しであり、許せないことである。目立つことの何が悪いのか、他から抜きんでた素晴らしいことがどうして皆からそういう形で非難されなくてはならないのか。ここに大きな問題がある。

武士道が役に立つとすると、こういう局面だと思う。武士道の中に「敵ながら天晴」という表現があるが、これは重要な考え方で、どれほど嫌いな相手であっても、その人が素晴らしい手柄を立てたときは、それを正当に賞賛できるだけの度量がなければならないことを表している。武士道の教科書である『甲陽軍鑑』には、「日頃からどれほど仲の悪い人間であろうと、嫌いな人間であろうと、その人間が目覚ましい働きをしたとき、それを正当に評価できない侍は弱い侍である」ということが書かれている。どれほど嫌いな奴でも、素晴らしい働きをしたらそれにふさわしい評価を下すという、冷静かつ度量を持った侍こそが真の侍であり、それが「敵ながら天晴」という言葉に表現されるということである。こういう感覚こそ、まさに今の社会において十分に意義あるものではないか。とにかく、多くの人間が一人の人間に対して弱い者いじめをするのは卑怯であるという感覚を、我々はもっとはっきりと持つ必要がある。

何か傑出した行動をとると、「目立ちたがりだ」と非難され、攻撃の対象になる。そうなると、人はそれを避けるべく、できる限り目立たないようにする。そして、必ず全体を仕切るボス的な存在が仕切る方向に同調する。いわゆる空気を読むわけである。空気を読んで同調し、そこから逸脱しないようにする。それが子どものときからの習い性となる。小学校、中学校、高校、大学、果ては企業に至るまで、その再生産が行われていく。

このような社会からどうして独創性が生まれるだろうか。どうして卓越性が出るだろうか。そのような形で子どものときから教育された人が会社に入って、「独創性を発揮しなさい」「人が考えないようなことをしなさい」と言われてもできるはずがない。そうしないように自己準拠を二十数年間やってきた人間ばかりが集まっているので、そこに独創性が出るはずなどない。つまり、根本の教育、まさに小学校教育が重要であり、大学ではもう手遅れなのである。

さらに、これは独創性の欠如であると同時に、倫理性の沈黙につながる。今のような社会では、偽装や不正が起きた場合、周りがそれに迎合していても「私はそれに同調しない」と言える人間が出るはずがない。これは組織的な倫理上の欠落であると同時に、経済的な能力としての独創性の欠如と言える。この両方が揃わないことは、日本社会の大いなる損失となってしまうのである。

90 年頃までは、世界の耳目を驚かすような優れた発明や商品化、独創性が相次いで出ていたと思う。ソニーのウォークマンに始まり、任天堂、トヨタのハイブリッド、シャープの液晶など、それらは世界を驚かせ、世界をリードするような技術・商品化があった。それに対して、この 10 年はどうだろうか。世界を驚かせて引っ張るような世界規模での発見、技術があっただろうか。私はそれが大いに欠けていると思う。こういう問題と裏腹でなければ幸いである。

近年、日本が発明したものと言えば青色発光ダイオードがあるが、発明者は企業から弾き出された形になっている。日本の社会では、弾き出された人がノーベル賞を取るのである。もう一人は山中伸弥先生だが、山中先生は経歴を拝見すると、いわゆる落ちこぼれだったようである。どうも、日本では弾き出された人や落ちこぼれの人がノーベル賞を受賞しているようで、そこに現代の大いなる問題を感じる。

④　劇づくり　～舞台芸術

4 番目は「劇づくり」いわゆる舞台芸術だが、じつは、日本は伝統文化のなかで舞台芸術という分野が特に優れている。様々な伝統文化の中でも、日本人の才能は舞台芸術のなかに最も輝かしく出ていると思う。能・文楽・歌舞伎という三大芸術が、いずれも世界無形文化遺産であることは周知の通りである。これらは三種三様で、いずれも個性的である。それを三つながらに持っている国は世界中を探しても他にどこにもない。日本は間違いなく世界に冠たる舞台芸術王国であると言える。

その日本が、音楽教育においてこれらに随伴する音楽(謡曲、浄瑠璃、長唄・常磐津・清元 etc.)を正規の音楽教育から排除している。これほど馬鹿な話があるかと私は声を大にして言いたい。しかし、まだ遅くない。これらは今も日本にある。文楽は某市長によって虐められて気息奄々だが、能も歌舞伎も元気である。じつは、この二つは政府のさしたる補助金なしに自立的に行われている。これは大したものである。例えば、西洋のオペラは大半が政府の補助金によって続けられている。ドイツに行くと、オペラの制作費の半分ほどに国家補助金が入っており、その代わりにチケットがとても安くなっている。これは文化立国であるドイツにとって生命線なので当然である。イギリスは自活的営業なので、チケットがとても高い。日本は優秀なことに、何百年も続く伝統文化であるにも関わらず、能も歌舞伎も一応、自立営業が成り立っている。これは凄いことである。世界の国で、この種の伝統文化が政府の補助金なしに成り立っている国はほとんどない。また、その舞台芸術としての内容の卓越

さも充分に世界中で評価されており、我々日本人も誇りをもって言えるものとなっている。

そのうえ、日本には、会のオープニングで披露されたような西洋音楽の受容による素晴らしい達成があるのだから、この二つが合同すれば、どれほど凄いパワーが出るだろうか。そこで我々はそういう運動として、日本のこれらの優れた伝統的な芸術的遺産と、日本がすでに獲得している西洋音楽の芸術の技法を統合する形で、新しい舞台芸術を現在制作しているところである。これは特に、日本の中でも有望な分野ではないかと思っている。

能楽とオペラ照明技法『源氏物語』
（撮影：笠谷和比古）

Ⅱ　物づくりにおける伝統文化と未来

（1）ネオ西山文化フォーラム

本日は「物づくり」に力点を置いて話したいと思うが、まずは「ネオ西山文化フォーラム」について紹介したい。これには、京都大学から松重和美先生、京都芸大から栗本夏樹先生が参加されている。

京都芸大の栗本先生は若手の准教授だが、漆の芸術を研究されている。漆を使ったアートで、作品は現代的だが、技法として漆を使っており、世界中で高く評価されている。ところが、漆工芸の分野そのものについて見ると、今は百均ショップの安直なものに押され、さらに後継者不足によって、日本の漆器産業は途絶えんばかりのあり様である。漆のアートや技法は世界中で高く評価をされているのに、日本の伝統産業である漆産業は気息奄々なのである。このミスマッチングは何とかしなければならない。

これは御列席の皆さま方にお願いしたいところであり、これほど素晴らしい技術・技法を持ちながら、その技法が絶えようとしているなど、これほど情けない話があるだろうか。この伝統的技法を敢えてローテクと言うなら、ローテクと現代文化のハイテクとの橋渡しをする役割、あるいは、そういうことができる人材が、今一番求められているのではないかと思う。それがもし繋がるならば、日本はその無尽蔵の潜在的なパワーを発揮できる。それが残念ながら切られようとしており、これほど勿体ない話はない。そのように日本は潜在的に無限のパワーを持っているのである。したがって、ダイヤモンドやメタンハイドレートを掘り出す必要はなく、現にあるものを見直すだけで充分なのである。それほどのパワー資源を

有しているということである。

同じ「ネオ西山文化フォーラム」で一般参加を呼びかけたところ、任意でありながら多くの人が集まった。ローテクとハイテクの統合、伝統文化と現代との統合をテーマとして呼び掛けると、多くの人が関心を寄せ、熱心にこの問題について考察された。この会では、竹による家屋の建築が紹介されたが、竹をより強化することによって建築資材として活かせないかということについて、具体的な取り組みが紹介された。このときから京都の西山は竹という素材をテーマにしているが、たくさんの人が熱心に問題に取り組まれていることが分かる。

（2）竹製電気自動車

① 第１号 ～竹の集成材を使用

実際の製作物として竹製電気自動車を紹介すると、我々が開発した栄えある第１号は、一見木製品のようだが、シャシの部分を除いて、ボディなどはすべて竹の集成材でできている。

竹製電気自動車第一号
（撮影：笠谷和比古）

② 第２号 ～竹を編む技術で作製

外信ロイターによる海外への紹介
（ロイター電）

第１号の変形が第２号で、今度はボディに竹を編むという技術を使っている。この「編む」という技術も日本の伝統技術である。竹籠やザルを編む。一見、スポーツカーのようで格好良いが、これは写真の写し方が上手いからで、撮ったのは通信社ロイターのカメラマンである。ロイターのカメラマンが撮るとまるでスポーツカーのように見えるわけだが、言い換えると、ロイターによってこの写真が世界中に発信されたということである。

実物はひなびた感じだが、むしろ、このひなびた感覚がこの自動車のコンセプトなので、これはこれで良いと思っている。一部、竹が乱れているのも演出で、あたかも自然をむしり取ってきたかのような形で演出しており、自然の中から登場してきたというコンセプトで作られている。

車体を竹で編む（東洋竹工株式会社）
https://www.toyo-bamboo.com/bamgoo.html

この日本の「編む」という技術は、どのような形にも成形できる。日本には「織る」「紡ぐ」などいろいろな技法があり、それによって様々な形を成形することができる。「織る」も「編む」も日本人にとっては当たり前の技法だが、世界で見れば決して当たり前ではない。例えば、日本人は普

通に菓子箱を紙で綺麗に包装するが、あれを外国の人に見せると「信じられない」と驚かれる。あるアメリカ人は「我々がこのように綺麗に包もうと思うと、この種の紙が 3 枚は必要だ」と言っていた。つまり「1 枚の紙で大きな箱を綺麗に包むことは考えられない。3 枚の紙をつなぎ合わせれば可能かもしれない」というわけである。日本人は子どもの頃からやっている折り紙の要領で包装しているので何の不思議もないが、その何の不思議もない技術こそが財産なのである。しかし、日本人はそれが傑出した技術であることに気づいていない。したがって、日本の「織る」「編む」「組む」という技術をもう一度見直そうということも、この竹製電気自動車の意図の一つである(今日、折り紙は Origami の名の下に世界中で、数学から宇宙衛星の分野にまで応用拡張されていることは周知のところである)。

スイスのドイツ系新聞の記事
（撮影：笠谷和比古）

じつは、私はこの竹製電気自動車(第 2 号)の写真に外国で出会った。スイスの新聞だったと思うが、「日本のしなやかな車」として紹介されている。これもロイター配信の写真だった。つまり、この車は外国で評判になり、注目されているということである。日本でも取り上げられたので見た方もおられるかもしれないが、テレビで紹介されていても、やはり日本では知名度が低いようである。イギリスの友人から聞いた話では、BBC のテレビ番組で紹介されたそうなので、アメリカやイギリス、ドイツでは、この車のアイデアが注目されていると言えるが、日本では残念ながらほとんど知られていないのが現実である。私が寒々しく思っているのはこういうところである。

その中で、日経新聞がこれに関してコメントの記事を書いてくれたが、日経新聞はあれこれ言った挙句、「おもしろいアイデアではあるが、安全性に問題がある」と結論づけていた。この車の安全性に問題があることは、日経新聞の記者がわざわざ言わなければならないような話だろうか。中学校新聞を書く豆記者でも言える結論だと思うが、超一流大学を出た経済の専門家の経済記者が、最後のコンクルージョンとして同じ程度のことしか言えないとは何事か。私は何の疑問もなくこれを書いている記者をクビにしろと言いたいし、また、そういう記事を平気で出している日経新聞も許し難い。それほど私は怒りを感じている。

それに対して、外国の記者はこれをどう表現しているかというと、「なかなかおもしろいアイデアだが、パンダと一緒には置けないね」と書いている。つまり、これはウィットとウィットの話なのである。こういう遊び心が出てきたら、それに対してどういう遊び心で答えるかというレベルの話のときに、「安全性に問題がある」と言い出すなどナンセンスの極みではないか。我々のアイデアが取り入れられなかったことを怒っているのでなくて、日本の超一流大学の超一流の経済学部が、そういうセンスの無い人間しか育てていないことに怒りを覚えるのである。日本の教育は根本的に間違っている。そういう人間しか育成できない大学など国の財産の無駄遣いである。そういう形でしか日本の社会は反応できない。ある程

度、予想はしていたが、まさに予想通りの愚劣な反応である。

③　第３号　～竹をゲル化してプレス加工

第 3 号機は竹をゲル状化し、プレス加工するというアイデアである。竹という素材からどれほどの応用転化ができるかという一つの試験問題と考えていただければと思う。

ただ、この竹製自動車については実際の走行が許可された。最初は、それこそ安全性に問題があるということで公道は走れないだろうと思っていたが、上手い抜け道があった。つまり、電気自転車というカテゴリーでナンバープレートが貰えたのである。電気自転車の上に籠を被せているというコンセプトで公道を走れることになった。日本の役所もなかなか粋な計らいをするものである。日本の法律も変えなければならないし、特区ということも考えなければならないと思うが、いろいろな組み合わせによって、いろいろな可能性は自ずから出てくるのではないかと思う。

Ⅲ　伝統文化と現代　～二つの分断の克服

（1）伝統世界と現代社会との分断

このようなことから、問題点として、二つの分断について述べたい。

一つは、前述の通り、伝統世界と現代社会との分断である。これは、明治の文明開化と呼ばれたあのムーブメント以来の現象だと思う。音楽教育はまさにそうであり、文明開化という壁をつくることによって、それ以前を文明以前、それ以後をコンテンポラリーとした。そしてそれは同時に、ウェスタンからの流入をコンテンポラリー現代とし、日本の伝統を現代と隔てた壁の向こう側に置いたのである。そういう壁があのときにできたので、この壁をいかに乗り越えるかが課題である。

（2）経済活動と文化・芸術との分断

二つ目は、日本に限らず一般的に言えるが、経済活動と文化・芸術との分断という問題である。これはすべての世界において言われるが、もはや経済活動にのみ終始する時代は終わった。文化・芸術の経済的価値に重要性があることは、今日では常識になりつつある。

特に、都市ブランドは大きな問題である。例えば、京都と大阪を考えた場合、この差は歴然としている。同じ立地条件で京都と大阪にマンションを建てた場合、その価値は雲泥の差で、それは京都と大阪のイメージの違いによる。大阪の人は怒るかもしれないが、これは歴然たる事実である(これはあくまで、この講演時点の印象で、現在の大阪は見違えるほどにイメージアップしている)。湯豆腐一つをとっても、単なる豆腐と言いながら、京都で食べると他で食べるよりも料金に 0 が一つ増える。京都で食べる豆腐と、それ以外の地で食べる豆腐は全く違うのである。これがまさに文化価値というものであり、これを無視してはならない。

特に、大阪にはこの価値が一番求められている。大阪の本来的な料理の技術は京都を凌いでいるはずなのに、大阪の料理屋で食べる料理と京都の嵐山で食べる料理では料金が一桁違う。これは明らかに、大阪が都市ブランド戦略において損失を被っているということを示している。大阪がこれについて無神経であることが信じ難い。まして文楽のような、大阪の価値を輝かせるべき重要な文化戦略的素材を持ちながら、それを潰そうとする人間が市長を務めているとは何事か。これほど素晴らしい世界に冠たる文化がありながら、それを活かしきれないのは行政マンの無能力以外の何物でもないと思う。先ほどの経済記者も同じだが、そういう市長の存在は大阪にとっても大損失だと言わざるを得ない。

（3）伝統的技能と先端科学との融合の事例

ここで、伝統産業の技法と現代の融合によって、すでに出されている事例を紹介したい。

京都は蓄積もあり、言うまでもなく、すでにいくつかの実例を出しているが、まず一つ目は、漆器の溜塗という技法を高級乗用車の外装に使っている例である。これはトヨタだったと思うが、一つ問題なのは、漆は日光に弱いという難点があり、天気に晒した場合の剥落をどうするかが課題となっている。しかし、これによって自動車の付加価値が高まることがあり得る。これは当然あって然るべきだと思う。

二つ目は、清水焼の陶磁器からセラミックコンデンサーを作る技法である。

三つ目は、金属箔紛の特殊な加工法で、西陣織の帯の金糸・銀糸を作る真空蒸着法という技法が開発されているが、聞いたところでは、タッチパネル型液晶画面にこの技術が応用されているそうである。原理については承知していないので、また教えていただきたい。

四つ目は、日本が誇る和紙である。世界無形文化遺産に登録された大変に素晴らしいものであり、もちろん紙の源流は中国だが、中国本来の紙と和紙は漉き方が根本的に違う。中国は溜め漉きというタイプで分厚い紙を作るが、日本は流し漉きという手法で「船」と呼ばれる道具をゆらゆら揺らしながら、皮膚感覚に近いほど薄い紙を作る。土佐の典具帖や、特に金箔を作るための極薄の紙を作る技法を日本は持っている。それで、この極薄の紙を作る技法を携帯電話やスマホの電極板の形成に使う。アラミド繊維を使うことによって、極薄の紙を漉く要領で電極、配線板を作ることができるという心強い応用例である。

最近はスマホになったが、それ以前の多くの日本の携帯電話は折り畳み式だった。あれには日本にしかできない技術が使われている。つまり、折り畳み式は折れ曲がる部分に基盤が通っているため、開閉を繰り返すと基盤が壊れてしまいがちだが、日本は独自の紙による製法を持っているので、開閉を無限に繰り返しても劣化が生じない。それが日本の携帯電話の強みだとかつては言われていた。そのような形の実用例もある。

また、金箔加工や組み紐の技術もある。組み紐の技術を用いることで、強度の高いカーボンチューブや繊維を作る技術を持てるようになっている。

これらはすでに作られた応用例だが、我々のこれからにとって心強い実例となっている。

発 行 日　2024 年　2 月　29 日
講演著者　笠谷　和比古
編集発行　公益財団法人　国際高等研究所
<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局
編集協力　アトリエ アロ　大仲佐代子

ISSN 2759-0577

満月に照らされて浮かぶ「ゲーテ」の胸像
（国際高等研究所庭園）